

埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書別冊2

仁科弘之教授退職記念論文集

言語をめぐるx章—言語を考える、言語を教える、言語で考える—

言語表現はいかに形を得て、人を慰めるか

—アンドレイ・プラトーフの手紙の一節によせて—

野中 進

埼玉大学教養学部・人文社会科学研究所

言語表現はいかに形を得て、人を慰めるか

—アンドレイ・プラトーフの手紙の一節によせて—

野中 進

【キーワード】

アンドレイ・プラトーフ、ロシア文学、言語表現の新しさ、定型の反復と変形、生活の言葉と創作の言葉

【要旨】

本稿は、ソ連時代のロシア作家アンドレイ・プラトーフ（1899—1951）の書簡に現れる一文「トーシャ [息子の愛称] の誕生日を祝い、大地を通して彼に接吻をしてくれ」という表現の特異性を考察する。いかに彼がその表現にたどり着いたかを、類似表現の反復という点から明らかにする。

1. はじめに

仁科先生の退職記念論集ということであり、彼との個人的つき合いから話を始めることをお許しいただきたい。思い出話ではあるが、本稿のテーマと関係がある思い出話である。

仁科さんとのつき合いは 20 年になる。私が 1997 年 10 月に埼玉大学に着任した時、お隣の研究室に仁科さんがいた。ちなみに、反対のお隣が美術史の泰斗、伊藤博明先生だった。伊藤さんも今年度いっぱい埼玉大学を去られる。新入り教官（国立大学法人化前は「教官」と言った）に最初に話しかけてくれた両先生が同じ日に本学を去られるのは、私にとって感慨深い符号である。

お付き合いのある方は誰もが知るとおり、仁科さんは話好きな方で、また聞き上手でもある。私はロシア文学を専攻するが、言語表現や文体論全般に関心があったので、言語学ではどうなのかと、仁科さんによく初歩的な質問をしに行った。彼は何時間でもつき合ってください関連文献も貸して下さった。

私は一方ではロシア・フォルマリズムやミハイル・バフチンなどのいわゆる文学理論をひっくり返しつつ、他方でアンドレイ・プラトーフ

ノフという作家を中心に具体的な作品分析を行ってきた。関心の中心には「言語芸術における形と意味のつながり」があった。この関連で仁科さんから教わったことはじつに多い。ただし、言語学をきちんと学ばなかった悲しさゆえ、私なりの勝手な解釈と変形を経ているが。

本稿はそうした知的交流の一例である。元になっているのは 2016 年 9 月、ペテルブルグの国際会議で行った報告原稿だが、構想段階で二三回、仁科先生のところに相談に行った。

私が行ったのは、前述したプラトーフという作家の妻宛の手紙に出てくる一節に着目し、その独特な表現がいかに生まれたかを考えるという作業である。その表現というのは、日本語に訳しにくいのだが、こういうものだ：「トーシャの誕生日を祝い、大地を通して彼に接吻をしてくれ（ロシア語原文：Поздравь Тошу с днем его рождения и поцелуй его через землю.英訳：Congratulate Tosha on his birthday and kiss him through the earth.）」。

トーシャとは 1943 年に亡くなった作家の一人息子である。私にはこの表現、とくに「大地を通して彼に接吻をしてくれ」の部分が新奇であるとともに、特異な文体で知られるこの作家らしいものと思われた。

ある言語表現が新奇か定型的かというのは答えるのが難しい問いである。ロシア・フォルマリストたちが論じたように、そこでは発信者の意図もさることながら、受け手の解釈も大きく働くからである（シクロフスキ 1988、ヤコブソン 1988）。つまり、作家本人がどんな意図（表現の新奇さを目指したか定型性を守ろうとしたか）でその表現を書いたかという問題だけでなく、作家の死後半世紀以上たって彼の私信（公開をまったく想定しなかったであろう）を書簡集という形で読む私たち自身の解釈の時代性という問題がある。上に引いたプラトーフの表現一つとっても、それが新奇か定型的かは決するのが難しいことである。

プラトーフの小説は特異な言語表現がよく知られている（日本語訳はプラトーフ 1992、プラトーフ 1997 などで読める）。ノーベル賞詩人のヨシフ・ブロツキーによれば、プラトーフの文学は「翻訳不可能」ということになる（Brodsky1978：xii）。「大地を通して彼に接吻をしてくれ」という訳文も、原文のもつ力を半分も伝えていない。「大地（земля、earth）」という単語は多義的で「土を通して」と訳す方が即物的な感じが出て良いかもしれないが、本論では他の使用例と比較できるよう「大地」に統一した。逐語的に訳すか、日本語としての自然さを取るか、というのはプラトーフの翻訳者には付きまとう悩みである。

私信という「生活の言葉」においても独自の言語表現—「プラトーフ的」と直観的には呼びたくなる—が現れるとすれば、それがいかに生じたかを調べることで、彼の文体について何らかの知見が得られるのでないか。そこで着目したのは、この表現に先行する類似表現の反復である。

結論から先に言えば、より定型的な表現の反復からより新奇な表現が生まれたことが確認された。この結果は、「言語表現における新しいものは古いものの反復を介して生ずる」というより一般的な仮説の検討へとつながるだろう。

2. プラトーフの略歴と彼の手紙

現代ロシアにおいて、プラトーフは 20 世紀ロシア文学を代表する作家の一人として揺るぎない評価を勝ち得ている。代表作としては長編『チェヴェンゴール』、中編『土台穴』『ジャン』等が挙げられる（後二作は日本語訳もある）。だが日本ではまだ知名度が低いので、簡単に略歴を紹介しておこう。

本名アンドレイ・プラトーフ・ヴィチ・クリメントフは 1899 年、ロシア中部の町ヴォロネシに労働者の息子として生まれる。15 歳から鉄道や工場で働くとともに、文学創作も始める。1917 年の十月革命を熱烈に支持し、技師としてのキャリアと作家としてのキャリアの両面で新国家建設に携わった。こうした点は同郷出身のイワン・ブーニンや同年生れのウラジーミル・ナボコフなど、貴族出身で亡命を選んだ作家たちと対照的である。

プラトーフの文学的才能は若い頃から注目された。処女詩集や短編が、著名な詩人ヴァレリー・ブリューソフや「ソ連文学の父」マクシム・ゴーリキーの称賛を受けた。だがプラトーフの独自の作風と文体はしだいに公式文学から排除されるようになり、多くの作品が出版されずに終わった。第二次世界大戦では従軍作家として戦場に出て、いくつかの短編を発表する。だが、帰還兵と妻の不実を描いた短編『帰還』（1946）がソ連兵士とその家族を侮辱するものだとして非難キャンペーンを張られ、失意のまま、1951 年に没する。

プラトーフの後半生に大きな影を落としたのは、一人息子プラトン（トーシャ）の逮捕と死であった。1938 年 4 月、当時まだ 15 歳の息子が突然、逮捕された。容疑は「ドイツのスパイ」だったが、もちろんでっち上げである¹。息子の釈放のためプラトーフは奔走した。

¹ スターリン時代の「大テロル」については無数の文献があるが、最近、邦

友人だった文学界の大立者ショーロホフらに頼って、スターリン宛の嘆願書も書いている。矯正労働収容所 10 年という判決が取り消され、トーシャが両親の元に帰ってきたのは逮捕から 2 年半後のことだった。その後トーシャは結婚し、一子を儲けている。だが監獄と収容所暮らしが祟ったのだろう、1943 年に結核で亡くなった。

両親の悲嘆は激しかった。当時、プラトーノフは従軍作家として前線に出ていたので、妻マリヤへの手紙が多く残された。そこにはトーシャの墓についての願いごとがくり返し記されている。「大地を通して彼に接吻をしてくれ」もその願いごとの一つである。

私の考えはこうである。同一の主題について類似の言語表現がくり返され、ある種のパタン性ないし範型性が見られるとしよう。その上で、その範型性を破る表現が現れたとすれば、それは新しい言語表現だと言えるのではないか。少なくともその作家にとっては。

私が問題にする表現とそれに先行する類似表現に関して、まさにこのことが言えるというのが本論の主張である。

3. 類似表現の分析

2014 年に刊行されたプラトーノフ書簡集を読むと、1943 年から 45 年の間、妻宛に書かれた手紙には息子の話題が何度も出てくる。とくに注目したいのは、手紙の末尾に記された命令法の文章である。一般に、手紙の始まりと終わりは定型性が高く、類似表現が反復されやすい。

プラトーノフが妻にこの種の願いごとをした最初の文章は以下のものである：

お前たち二人に会えずに寂しい—お前と私たちの息子に。とても寂しい。私にとって死んだトーシャは、つまるところ永遠に生きている。(…) 宿舎にこもって、お前と墓地の墓のことを考えている。私の代わりに彼の神聖な墓の大地に接吻をしてくれ。
(1943/5/24)²

これ以降、彼は同様の願いごとをくり返す。そのうち命令法の文にしぼってまとめたのが、本論最後の表である。私が確認しえたかぎり、

訳が出た興味深い回想録としては以下のものがある。イワーノフ＝ラズームニク『監獄と流刑』松原広志訳、成文社、2016 年。

² 以下、引用文中での強調下線はすべて引用者によるものである。

18 通の手紙でそうした文が現れる。

これらの表現を比較検討した結果、次のことが分かった。

(1) 使用回数と目的語の選択幅からみてもっとも重要な動詞は、「接吻をする（「接吻をしてくれ」）*поцеловать*（*поцелуй*）」と「お辞儀をする（「お辞儀をしてくれ」）*поклониться*（*поклонись*）」である。これらの動詞はそれぞれ「接吻 *поцелуй*」と「お辞儀 *поклон*」という名詞から派生している。「お辞儀 *поклон*」というロシア語は、日常的な会釈のレベルから祈りの際に深く頭を下げるレベルまで含んでいる。後に見るように、プラトーフの手紙でも「お辞儀してくれ」「頭を垂れてくれ」「よろしく伝えてくれ」などと訳し分けた方がよいのだが、本稿の目的に鑑みて「お辞儀してくれ」に統一する。重要性から言って、この二つの動詞はプラトーフの関連表現中、対をなしている。

(2) この二つの動詞の目的語としては、「大地 *земля*」「墓 *могила*」「亡骸 *прах*」「息子 *сын*」（固有名「トーシャ *Тоша*」と代名詞「彼 *он*」も併せて）「枕辺 *изголовье*」が現れる。

(3) 上記の動詞と目的語の組合せには次の特徴が見られる。「接吻をしてくれ」が結びつくのは「大地」（表番号[1][3][4][16]）、「墓」（[2][8][11][12]）、「枕辺」（[1][3][4][16]）、「息子／トーシャ」（[16][18]?）であるが、「亡骸」とは結びつかない。一方、「お辞儀をしてくれ」が結びつくのは「亡骸」（[7][14][16]）、「息子／トーシャ」（[6][17]）、「墓」（[3]）であるが、「大地」とは結びつかない。言いかえると、動詞「接吻をしてくれ」は目的語「大地」を占有的に支配している。他方、「お辞儀をしてくれ」は「亡骸」に対して同様の関係性を示す。したがって、「大地に接吻をしてくれ」と「亡骸にお辞儀をしてくれ」の二つはとくに安定的・定型的な表現だと見なしうるだろう。

加えて指摘すべきこととして、「息子／トーシャ」は他の目的語に比べて使用頻度が著しく低い。私が問題にする「大地を通して彼に接吻をしてくれ」以前には一度現れるのみである（[6]「私たちの息子にお辞儀してくれ」）。

(4) 形容詞について言えば、「神聖な *святой*」が主調的役割を果たしている。「墓」（[1]）、「息子」（[2]）、「亡骸」（[7]）、「いとし子」（[15]）、「受難者」（[16]）に付せられている。時系列的に言えば、「神聖な」という形容詞が息子に関連のある事物（「墓」「亡骸」）から息子自身（「息子」「いとし子」「受難者」）へと、結びつきを強めていることが分かる。死んだ息子に聖性を付与することが妻マリヤへの手紙の主たるテーマだったと言えるだろう。

(5) 私が問題にする表現の現れる手紙[16]では、以上に述べた範型が

すべて展開されている：

トーシャの誕生日のことで別に手紙を書きたいと思ったが、九月二十二日までにお前に届かないかもしれない。私から彼の亡骸にお辞儀をし、私たちの長子、私たちの神聖な受難者の頭上の大地に接吻をしてくれ。できることなら、二十二日にサーシャに何か贈ってやってくれ、彼の父親にはもう何も贈ってやれないのだから。トーシャも自分の息子がプレゼントをも受け取ることに満足するだろう。彼、トーシャ本人はもう私たちのプレゼントを受け取れないのだから。

トーシャの誕生日を祝い、大地を通して彼に接吻をしてくれ。
(1945/9/12—13)

(1) で述べたように「亡骸にお辞儀をしてくれ」と「大地に接吻をしてくれ」はプラトーフの表現のなかで安定性・定型性が高い。この二つの表現の結合ないし交差として、「大地を通して彼に接吻をしてくれ」という第三の表現を捉えうるのではないだろうか。この問題の表現の新しさと力強さは以下のように説明できるだろう：

(a) 「息子／トーシャ」という目的語はこれ以前には一度しか現れておらず、しかもそれは与格（間接目的語）であった。[16]で初めて「息子／トーシャ」が（「彼」という代名詞を介してではあるが）対格の直接目的語で現れる。日本語だと「彼に接吻をしてくれ」となるが、ロシア語の *поцеловать* は英語の *kiss* 同様、直接目的語をとる。一般に、直接目的語は間接目的語よりも主語との強い結びつきを表すだろう。グリムによれば、対格は「動詞に込められた概念による、もっとも全面的かつ完全な対象の支配」を表す（Виноградов 1972 : 140）。

(b) 「大地を通して彼に接吻をしてくれ」が「大地に接吻をしてくれ」と「亡骸にお辞儀をしてくれ」の結合ないし交差だとすれば、「亡骸に接吻をしてくれ」（!）となるはずである。しかし、これはプラトーフが妻であり母でもあるマリヤに伝えたかった真意を裏切るだろう。彼にとって重要だったのは、息子の死の確認ではなく、息子の復活だったと考えられるからだ。「亡骸に接吻をしてくれ」でなく、「彼（トーシャ）に接吻をしてくれ」と言わなければならなかった。

(c) 復活という主題との関連では、上記（3）で述べたように、プラトーフは「神聖な」という形容詞を死んだ息子に対して何度も用いている。聖性と復活は、当然ながら深い結びつきがある。また、[16]の手紙では息子の誕生日が話題になっていることも指摘すべきだろう。

誕生と復活もまた深い結びつきがあるからだ。

(d) 「彼の亡骸にお辞儀をしてくれ」と「大地に接吻をしてくれ」の二つから「大地を通して彼に接吻をしてくれ」という第三の表現が生じたと考えるとき、「彼の亡骸に」が「大地を通して」に変形したと解釈する余地がある。というのも第一に、与格（「亡骸に」）は意味的に方向性と結びつき、「受信者や動作の向かう地点を表す」（Виноградов 1972 : 142）。第二に、ロシア語の прах という単語には「亡骸」という主要語義の他に、「大地、土」という語義もある（Даль 1907 : 998）。したがって、「彼の亡骸に」という表現は二重の置換え（目的地→経路、亡骸→大地）を介して「大地を通して」に変形したと解しうる。

以上のように、私が問題にする表現は、同一の主題をめぐるさまざまな、しかしある種の範型性を持つ諸表現の反復と変形から生じた結論づけられるだろう。

それに関してもう一つ指摘したいのは、こうした変形を可能にした要因として息子の忘れ形見のサーシャ（アレクサンドル）、そして息子の死後に生まれた娘マーシャ（マリヤ）の存在だ。プラトーフは、息子が死んだ後、娘が生まれたことの意味について思いを凝らしていたようだ。彼の手帳には次の文章がある：「二人目の子の誕生もまた一人目の子への裏切りだろうか？ 愛の裏切りのように」（Платонов 2000 : 273、409）。

特徴的なのは、プラトーフがしばしば、死んだ息子、孫、娘を並べてマリヤに願いごとをしていることである。「兵隊のお祖父さんの代わりに彼に接吻し、私たちの息子の墓にも接吻をしてくれ」（[11]）、「私の代わりに私たちの息子の亡骸にお辞儀をしてくれ。孫に接吻をしてくれ」（[14]）「私の代わりに私の神聖な愛し子の墓の枕辺に接吻をしてくれ。サーシャに接吻をしてくれ」（[15]）。この三例では、「サーシャ」はすべて対格で現れている。他方、前述したように、「息子／トーシャ」が[16]以前に対格で用いられることはない。死んだ息子への対格での言及が、生きていた孫への言及に導き出されるようにして可能になったと言えるだろう。死者と生者をつなぐというモチーフ（それはすでに[1]に現れていた）が、当初は不可能だった表現を可能にしたのである。

[16]以後の表現について言えば、息子の復活への確信が表れているように見える。プラトーフは奇妙に清らかなトーンで妻に書き送っている：

もうすぐあれは二十三才になる！彼にお祝いを言い、私からの

お辞儀をしてくれ。サーシャに接吻をしてくれ、私の大好きなちっちゃなマーシャを抱きしめてくれ。(1945/9/16)

さようなら、大切なお前。私たちの子供たちに接吻をしてくれ。お前を抱擁する。(1945/10/10)

「私たちの子供たち」という表現において死んだ息子も意味されていることは確かだろう。自分の息子と妹ともに、トーシャはふたたび対格で言い表されたのである。

この手紙以降、プラトーフがこの種の願いごとを妻に書き送ることはもはやなかった。死んだ息子にどう処するかという重大な問題に何らかの「結論」が出たのではないだろうか。もしそうだとすれば、その結論を出すのに役立ったのは思索と感情だけではなく、言語表現そのものでもあっただろう。

4. 生活の言葉と創作の言葉（結びに代えて）

プラトーフの私信の表現に私がこだわったのは伝記的関心からではない。彼の独特な文体が「生活の言葉」にも出現することへの驚き、そして彼の「創作の言葉」に通ずる途を見つけないという願いからである。その試みを最後に記して、本稿の結びとしたい。

じつは、大地や死者の復活などの主題は、息子の死以前からプラトーフにとって中心的なものであった。伝記的にも、職業作家になる以前、彼は土壌改良技師として働いていた。また代表作『土台穴』は、労働者たちがソ連建設のために大地に穴を掘るという舞台設定である。死者の復活という主題にも若い頃から強い関心を寄せている。19世紀後半のロシアの思想家ニコライ・フォードロフは科学技術による先祖たちの復活というきわめて独特な思想を著し、多くのロシア人に影響を与えた。プラトーフもその一人だと言われる。そもそも、レーニン廟を思い出しても分かるように、ソ連という国家思想には不死の思想が息づいていた。

だが、プラトーフについて言えば、息子の死（そして多数の死者を出した独ソ戦）以降、大地と復活をめぐる新しい要素が認められるように思う。

前節で論じたように、「大地を通して彼に接吻してくれ」という特異な表現は「大地に接吻してくれ」と「彼の亡骸にお辞儀をしてくれ」という二つの表現の結合ないし交差から生まれたと考えられる。だとすれば、交差のしかたにはもう一つあって、「大地にお辞儀をしてくれ（祈ってくれ）」という表現も生まれうるはずである。

これはやや無理な議論に見えるかもしれない。だが、独ソ戦を舞台にした彼の作品では大地への特別な態度が前景化されている。そのことを『虚ろな心』という短編を例に見てみよう。この作品は 1944 年に書かれたが、当時は発表を許されず、作家の死後、1967 年によく出版された。

父親を失った家庭（母と子）と語り手「私」の戦地での交流を描いた短い作品だが、そこでは「大地」のモチーフがくり返し現れ、しかもその表現と内容は新奇さを増していく。その新奇さは、作家が同時期に妻に書いた手紙を思わせるものである。以下に引用しよう：

女と息子は自分たちの死者を見舞うために墓にやってきた。彼らは埋葬の地に膝き、黙って大地を見つめていた。女の眼からは小さなまばらな涙が流れ、苦しい悲しみが彼女を捉えた。あたかも彼女の悲しみが死者を前に生きていることの償いであるかのように。(Платонов 2010 : 250)

「パパを掘り出そうよ、ママ！」息子は母親に言った。「家で寝かせてあげようよ。僕たちの家だって今は大地の中なんだから…」

母親は息子を父親のもとから連れ去った。死者はふたたび一人で大地の中に残った。(Платонов 2010 : 251)

「ドイツ人に何の用があるんだい？」と私は孤児に尋ねた。「殺したいのか？」

少年は不思議な哀しさをこめて私を見た。

「ううん…最初にお父さんを僕たちに返してもらおうんだ。それから自分で大地に死ねばいいよ」(Платонов 2010 : 252)

作品の進行に従って、大地／土のモチーフは反復され、表現も新奇さを増す。最後の下線部の「大地に死ぬ умереть в землю」というロシア語表現は文法的に破格である。破格使用は子どもの台詞という理由で部分的に説明されるが、他方では、大地の象徴性を強めるためとも解しうるだろう。

さらに 1947 年、プラトーフはこの短編の一部を書き直し、『手帳から』というエッセーに入れた（だがそのエッセーが公刊されたのもようやく 2000 年のことである）。ここでは、息子と母の対話が以下のように書き直されていた：

『虚ろな心』：「死んだ人を医者直せる？」

「ううん、お前。医者には直せないよ」
『手帳から』:「死んだ人が大地から生きることはある？」
「ううん、お前、それはないよ」

ここでも「大地から生きる *жить из земли*」は文法的に破格で、新奇な表現となっている。「甦る *воскреснуть*」を子どもなりの語彙と理解で言い表したのだと説明できるが、新奇な表現が大地の象徴性を強めている。

本稿で見てきた「大地を通して接吻する」「大地に死ぬ」「大地から生きる」という三つの表現は、たしかに「プラトーフ的」と呼べるだろう。これらの例は、作家が類似表現を反復しつつ、より定型的な表現からより新奇な表現に進む傾向があったという私の主張を支えるものである。

たった一つの言語表現についても興味深い進化 (evolution) を見て取ることができる。言葉に関する学問も、それだけ奥深く、幅広いものでなければならない。それには様々なアプローチが必要だろう。

具体的な言語表現への関心がスタートであり、ゴールでもあるという点で、言語学と文学研究はつながりうるし、たがいに与えるものも少なくないだろう。仁科さんとの二十年にわたる交流で私が学んだことはそれだった。今後もそうしたお付き合いができれば幸いである。

参考文献

- シクロフスキイ, ヴィクトル (1988) 「言葉の復活」 坂倉千鶴訳、桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド 6 フォルマリズム』国書刊行会, pp.13-19.
- プラトーフ, アンドレイ (1992) 『プラトーフ作品集』原卓也訳, 岩波文庫
- プラトーフ, アンドレイ (1997) 『土台穴』 亀山郁夫訳, 国書刊行会
- ヤコブソン (1988) 「芸術におけるリアリズムについて」 谷垣恵子訳, 桑野隆・大石雅彦編『ロシア・アヴァンギャルド 6 フォルマリズム』国書刊行会, pp.49-57.
- Brodsky, Joseph (1978) «Preface», Andrei Platonov, *Collected Works*, Ann Arbor: Ardis, pp. ix—xii.
- Виноградов В. В. (1972) *Русский язык (грамматическое учение о слове)*. Изд. 2-ое. М.
- Даль В. (1907) *Толковый словарь живого великорусского языка*. Под ред. И. А. Бодуэна де Куртене. СПб.—М. Т. 3.

Платонов А. П. (2009) Архив А. П. Платонова. Кн. 1. Научное издание. М.: ИМЛИ РАН.

Платонов А. П. (2010) Записные книжки. Материалы к биографии. М.: ИМЛИ РАН, «Наследие».

Платонов А. П. (2014) «...я прожил жизнь»: Письма. 1920—1950 гг. Сост., вступ. статья, ком. Н. В. Корниенко и др. М.: АСТ.

付表

アンドレイ・プラトノフの妻宛の書簡中、死んだ息子と孫たちに関して何らかの配慮を依頼している箇所を挙げた。命令法の動詞への強調下線は引用者。文脈を分かりやすくするため、前後の文も引用している。ページ数は以下の版によった：アンドレイ・プラトノフ『「...私は人生を生き抜いた」1920—1950年代の書簡』ナターリヤ・コルニエンコ編、モスクワ、2014年。

№	頁	日付	引用
[1]	526	'43/5/24	宿舎にこもって、お前と墓地の墓のことを考えている。私の代わりに彼の神聖な墓の大地に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> 。(Сижу в общежитии, думаю о тебе и о могиле на кладбище. <u>Поцелуй</u> землю на его святой могиле за меня.)
[2]	528	'43/5/28	私の代わりに私たちの神聖な息子の墓の枕辺に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> 。(Поцелуй за меня могилу в изголовье нашего святого сына.)
[3]	532	'43/6/8	私の代わりに私の息子の墓に <u>お辞儀</u> をし、私の代わりにその大地に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> 。(Поклонись за меня могиле моего сына и <u>поцелуй</u> за меня землю на ней.)
[4]	534	'43/6/12	お前はもちろん、私たちの息子のところに行くだろう。枕辺の土に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> 。私がこの世の何ものより彼を愛していると <u>伝えてくれ</u> 。(Ты, конечно, пойдешь к нашему сыну, <u>поцелуй</u> его землю в изголовье, <u>скажи</u> , что я люблю его больше всего на свете.)
[5]	535	'43/6/24	とくにある中編を一何についてかはわかるだろう—すぐに書きたい。彼の墓の枕辺に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> 。私がすぐに彼のところに挨拶に行くと <u>伝えてくれ</u> (Особенно хочу немедленно написать одну

			повесть — ты знаешь о чем. <u>Поцелуй</u> изголовье его могилы. <u>Скажи</u> ему, что я скоро приду к нему и поклонюсь ему.)
[6]	536	'43/6/25	私たちの息子に <u>お辞儀</u> をしてくれ。お前に接吻を送る (<u>Поклонись</u> нашему сыну. Целую тебя.)
[7]	542	'43/7/30	大切なお前、手紙をおくれ。そして私たちの受難者の神聖な亡骸に <u>お辞儀</u> をしてくれ (Пиши же мне, милая, и <u>поклонись</u> святому праху нашего мученика.)
[8]	543	'43/7/31	私たちの息子の墓に <u>接吻</u> をしてくれ。私がお前に会えるよう、体に気をつけておくれ (<u>Поцелуй</u> могилу нашего сына. Береги себя, чтобы я увидел тебя.)
[9]	544	'43/8/3	受難者である私たちの息子の亡骸に私たちの運命のことを <u>祈</u> ってくれ。私はよく、彼が元気で生きているような気がする、彼の声の響きは私たちに届かないが、彼が私たちを見守ってくれている気がする (<u>Помолись</u> о нашей судьбе праху нашего мученика-сына. Мне часто кажется, что он цел, существует, и лишь звуки его голоса не доходят до нас, а он наблюдает за нами.)
[10]	553	'43/10/4	今日で私たちの息子の命日から九カ月が過ぎた。彼の死から、彼が生まれる前にお前のお腹の中にいたのとちょうど同じだけの時間がたったのだ。息子がすべての生けるものから去ってもう 270 日になる。ほとんど 300 昼夜もあれば大地の中に横たわっている。だが彼は自分の似姿を遺していった—かわいいサーシャを。兵隊のお祖父さんの私に代わって彼に <u>接吻</u> をして <u>くれ</u> ... (Сегодня 9 месяцев минуло со дня смерти нашего сына. Прошло с его смерти ровно столько же времени, сколько он лежал перед рождением в твоём чреве. И вот уже 270 дней прошло, как он ушел ото всех живых, почти триста суток он лежит в земле. Но он оставил после себя свое подобие — милого Сашку. <u>Поцелуй</u> его за меня, деда-солдата...)
[11]	554	'44/3/15	あれ [サーシャ] は私のことを覚えているだろうか、

	-555		それとももう忘れ始めているだろうか。兵隊のお祖父さんの代わりに彼に <u>接吻をし</u> 、私たちの息子の墓にも <u>接吻をしてくれ</u> 。(Помнит ли он [Саша] обо мне или уже стал забывать? <u>Поцелуй</u> его за деда-солдата и <u>поцелуй</u> еще могилу нашего сына.)
[12]	559	'44/6/27	そして私は思う—もしお前とサーシャ、そしてお前の中でまだ目覚めていない者とみんな一緒にここを散歩できたらどんなにいいだろうと。私に代わって私たちの息子の墓に <u>接吻をしてくれ</u> 。(И я думаю — как хорошо было бы, если б ты, Сашка и тот, кто в тебе еще не проснулся, гуляли все вместе здесь. <u>Поцелуй</u> от моего имени могилу нашего сына.)
[13]	561	'44/7/1	何らかの理由で四日に追善供養をしないなら、また後で <u>供養をしてくれ</u> 。私も七月四日、目に見えず、思い出とともに彼の墓の傍に立ち、あれを思って泣こう。(Если почему-либо 4-го не будет панихиды, то <u>отслужи</u> ее позже, и я так же, как и 4-го июля, буду незримо, своею памятью стоять у его могилы и плакать по нем.)
[14]	564	'44/7/13	強くお前を抱きしめる。私の代わりに私たちの息子の亡骸に <u>お辞儀をしてくれ</u> 。孫に <u>接吻をしてくれ</u> 。(Крепко тебя целую. <u>Поклонись</u> за меня праху нашего сына. <u>Поцелуй</u> внука.)
[15]	566	'44/7/17	お前に接吻し、強く抱きしめる。お前がどんなにつらいか私には分かる。私の代わりに私の神聖な愛し子の墓の枕辺に <u>接吻をしてくれ</u> 。サーシャに <u>接吻をしてくれ</u> 。(Целую и обнимаю тебя крепко. Я знаю, как тебе тяжело. <u>Поцелуй</u> за меня изголовье могилы моего святого любимца. <u>Поцелуй</u> Сашку.)
[16]	576	'45/9/12 —13	トーシャの誕生日のことで別に手紙を書きたいと思ったが、九月二十二日までにお前に届かないかもしれない。私から彼の亡骸に <u>お辞儀をし</u> 、私たちの長子、私たちの神聖な受難者の頭上の大地に <u>接吻をしてくれ</u> 。できることなら、二十二日にサーシャに何か贈ってやってくれ、彼の父親にはもう何も贈ってやれないのだから。トーシャも自分の息子がプレゼントを受け取る

			<p>ことに満足するだろう。彼、トーシャ本人はもう私たちのプレゼントを受け取れないのだから。</p> <p>トーシャの誕生日を<u>祝い</u>、大地を通して彼に<u>接吻をして</u><u>くれ</u>。(Хотел написать отдельное письмо по поводу дня рождения Тоши, но боюсь, что оно не успеет дойти до тебя к 22 сентября. <u>Поклонись</u> его праху от меня и <u>поцелуй</u> землю в голове нашего первенца, нашего святого мученика. Если будет у тебя возможность, подари Саше что-нибудь 22/IX, раз уж нельзя ничего подарить его отцу. Тоша будет доволен тем, что сын его получит подарок, раз он сам, Тоша, уже не может получить подарка от нас.</p> <p><u>Поздравь</u> Тошу с днем его рождения и <u>поцелуй</u> его через землю.)</p>
[17]	579	'45/9/16	<p>ここ [ヤルタ] にかつてお前はトーシャと来たね。明日私は、彼の足がかつて踏んだのと同じ石段を歩こう。</p> <p>もうすぐあれは二十三才になる！彼に<u>お祝いを</u>言い、私からの<u>お辞儀</u>をして<u>くれ</u>。サーシャに<u>接吻</u>をして<u>くれ</u>、私の大好きなちっちゃなマーシャを<u>抱きしめて</u><u>くれ</u>。(Здесь [в Ялте] когда-то и ты была с Тошей. Завтра я пройду по тем же камням, где когда-то ходили его ноги.</p> <p>На днях ему будет 23 года! <u>Поздравь</u> его и <u>поклонись</u> ему от меня. <u>Поцелуй</u> Сашу, <u>обними</u> мою любимую Машку.)</p>
[18]	581	'45/10/10	<p>さようなら、大切なお前。私たちの子供たちに<u>接吻</u>をして<u>くれ</u>。お前を抱擁する。(До свиданья, дорогая. <u>Поцелуй</u> наших детей. Обнимаю тебя.)</p>

(埼玉大学大学院人文社会科学研究科教授)